人間の條件

第一部

五味川純平著

三一新書

著者略歴

大正五年滿州に生る
東京外語英文科卒
滿州で就職、応召
昭和二十三年引揚
現住所　東京都渋谷区代々木西原九五一

人間の條件　第一部　　定価 170円

1956年 8月10日 第一版発行
1958年 10月30日 第四十七刷発行

著者　五味川純平
発行者　田畑　弘
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　本間製本株式会社
発行所　株式会社　三一書房
京都市左京区北白川西平井町 24
電話 京都(7)3101,3885番
振替 京都 6403番
東京都千代田区飯田町2の14
電話 東京(33)9393,(30)1476
振替 東京 84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　三一新書 49

人間の條件

第一部

五味川 純平 著

三一書房

埼玉縣熊谷勞政事務所

まえがき

或る局面での人間の條件を見究めたいという途方もない企みを私はした。大それたことだとは、手をつける前からわかっていたが、あの戦争の期間を、間接的にもせよ結局は協力という形で過ごして来た大多数の人人が、今日の歴史を作ったのだから、私は私なりの角度から、もう一度その中へ潜り直して出て来なければ、前へ進めないような気がした。書き終ってみて、果して出て来られたかどうかは怪しいものだが、この一年間、作中の人物と共にあの数年間を暗中模索したことだけは事実である。そしてまた、人間が生きて行く條件を、あとになって整理したり修正したりしても、失われた日日は遂に甦らないということも、悲しい事実である。

「人間の條件」という題名は、アンドレ・マルロオの作品に同名のものがあるので、随分気になつたが、他につけようがなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

これは勿論フィクションである。梶をはじめ、人物は実在しない。いつの時代でもそうだが、歴史の事実はフィクションよりも遙かに複雑で、ドラマチックである。それはそのわけなのだ、無数の人間が長い時間をかけて織り成す壮大な社会劇なのだから。そういう歴史を前にしては、虚構という手法に拠らなければ、とても真実の門口に近づくことが出来るものではない。

物語の時を戦争のさ中に置いたけれども、歴史がもしなんらかの程度に繰り返されるものならば、われわれ戦中派が味わった苦汁は、戦後派の人人とも無縁ではないかもしれない。何故と云って、われわれが前の世代の遺産としてあの戦争を苦痛と絶望の中で背負った事実があるにもかかわらず、いままた怖ろしい遺産相続の遺言がなされようとしているかに見受けられるからである。多少でもそういう共感が得られるとすれば、作者の願望は殆ど剰すところなく果される。

ところで、何を書くにしても、それが物語であるならば、面白くなければならない、という観念から私は離れられない——面白く書けたかどうかは別として——。私がここで云う面白さは、練達の文学者達からは「通俗」だと誹謗されそうな面白さである。もし大衆

の健康な欲望が求め、親しみ易いと感ずる面白さがそういうところにあるのだとしたら、私はそれを探したい。それが追随主義になるかならないかは、面白さのせいではなくて、主題の質の問題である。私はせいぜい面白く書こうとした。それにもかかわらず、随所に晦渋で生硬なところがあるらしい。力量不足で、大それた仕事が所詮手に負えなかったのである。

この作品に関して、三一書房の編集部長竹村氏から過分な評価を頂いたが、これが纒まるまでには、理論社の小宮山氏、祖父江氏、劇団民芸の早川氏から、示唆に富んだ数多くの助言を頂戴した。殊に、早川氏には、この小説の発想の当初から随分厄介をかけた。これらの人人の厚意と友情がなければ、無名の作者の作品は活字にはならなかったに違いない。記して心からの謝意を表したい。

一九五六年七月一一日

五味川純平

第一部

1

いつまで歩いてもきりがない。そうしたものだ、二人連れで歩く道は。とりとめなく語り合ったが、肝腎なことには触れていない。触れたいくせに、互に避けている。

棉のような雪が宵闇の迫る中を静かに舞い降りていた。寒くはなかった。満洲では、こういう雪は珍しい。たいていが砂のようにサラサラとして、吹きつけられて肌を刺す。それが、いまは、ふんわりと柔かく包むようである。

町角で二人は立ち停った。人通りは尠なかった。雪でふちどられはじめた窓々に灯が暖かく瞬いていた。ここから先き、道が二つに分れている。

「あたし、もう、行きましょうか?」

美千子が心とは反対のことを云った。

梶は美千子の肩越しに、角の家具店の飾窓を見ていた。美千子は梶の視線の先きに、壁掛の皿を見た。ロダンの《ベーゼ》の模写を焼付けたのであろう、裸形の男女が犇と抱き合っていた。

梶の視線がそこから外れて、宙に迷った。美千子がそれを捉えた。

「あなたらしくないわ」

「何故!」

「逃げているんですもの」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

男の眸が灯を受けて強く光った。それが据って、注がれると、女は胸が迫って切なくなった。
「あたし、納得出来ないの。いくら戦争だからって、愛し合っているのに結婚しない方がいいなんて」
「……しない方がいいと思うんだ」
「どうして？」
「僕にだってほんとうのことはわからないよ」
梶はまた壁掛の皿を見た。美千子は梶の外套の幅広い肩に積った雪を撫でて、その襟をそっと握った。
「欲しくないの？……あたしを」
「欲しいよ！」
これは激しかった。青年の欲望がほとばしるようであった。
「……あたしも欲しいわ。……だのに、どうして結婚出来ないんでしゃ」
「何度云ったらわかってくれるんだ」
「知らない！……聞きたくないわ」
と、かぶりを振った。頭巾に積った雪が舞い落ちた。
「いつ赤紙が来るかわからない、明日来るかもしれない、そうおっしゃるんでしょ？　聞きたくないの、そんなこと。あたしは平凡な女です。好きな人と結婚する。それ以外の幸福なんて考えられないの。結婚して、その翌日に赤紙が来たって、あたし後悔なんかしやしない。そりゃ、泣くわ。きっと、死にそうなほど泣くわ。でも、それ以外の幸福なんてどうしても考えられない」
男は喜んだ。諦らしかった。そして当惑した。赤紙か白紙か、必ず来るだろう。それも近いうちに。行け

ば、還れないものと、悲壮な感慨が先に立つ。数理の確率では割り切れない、どうしようもない気持である。いっそのこと、欲望にまかせて幸福とおぼしいものにむしゃぶりつくか。束の間の、明日も知れぬものであっても、女は覚悟しているというのだ。

「じゃ、これから……」

と、ためらいながら云った。

「僕の寮へ行く、僕の部屋に泊めるよ、今夜は。かまわないか？」

女の眼が一度は伏せて、それからキラと光った。

「いゝわ。……行くわ！」

美千子はその方角へ踏み出した。梶は動かなかった。

「君は君の寮へ帰り給え。……来てはいけない」

美千子が立ち停って、向き直った。宵闇を隔てて、その顔が暗く歪んで見えた。

「試したのね！　試してはいけないことを」

声が慄えていた。それが強く変った。

「怖いの？　模範社員の経歴に疵がつく？　……あなたは臆病よ。卑怯よ。……梶さんのバカ！」

美千子は別の道を走り去った。梶は黒い空を仰いだ。雪が降りしきっていた。

臆病でも卑怯でも、よかったのだ。模範社員の経歴に疵がつく？などと云われさえしなければ。梶は愛情の痛みと憤怒を覚えた。美千子の衣服を剝ぎ取って、欲情を存分に注ぎたかった。その美しい豊かな肉体に埋没して幸福の幻想に浸りたかった。せめて、戦争を忘れたかった。あすか、あさってか、いつの日か、そこへ引

き出される自分自身を。

梶はもう一度飾窓の中の掛皿を見た。裸形の男女は恍惚として抱き合っていた。戦争だからといって、何故そうしてはならないだろう？　彼が美千子をそうする機会は去ってしまったのかもしれなかった。彼は灼けつくような渇望に喘いだ。若い男の幻想の中では、幸福は、たいてい若い女の白い裸体の形をとっている。それだのに、彼はそれを抱き寄せ抱き締めようとしなかった。しかも、女がそれを望んだというのに。

2

五十人ほども机を並べている広い課内で、真剣に仕事をしている者は尠なかった。巨大な会社では、たいてい何処でもそうである。定時に出勤して定時に退社する。その間の時間を要領よく空費すれば、生活が一応保証されるのだ。植民地の会社では殊にその傾向が著しい。

暖房がよくきいて、室内は暑かった。みんな上衣を脱いで、袖覆輪をつけて、机についているが、無駄話をしたり、会社用箋で手紙を書いたり、電話で長話をしたりしている。煙草の煙があちこちから盛んに立ち昇る。妙に喉を刺戟するような匂いがするのは、煙草の配給量が切れて、地場の安煙草をあさるせいである。

梶のテーブルに属する中年の准職員が隣の同僚に云った。

「スターリングラードでドイツ軍が参るとは思わなかったよ。こうなると、もうドイツもあまり当てにはならないね」

「これからソ連がどう出て来るかだよ、問題は」

笑いながらだが、日ごろの懸念が正直に出ていた。満洲には太平洋はない。だから対米戦争の実感は稀薄である。満洲には蜿々として長いソ満国境がある。だから、ソ連がどう出るか？この方がよほどに切実なのだ。

「心配ない」

と云ったのは、向い側の机の若い准職員である。

「満洲には《関特演》以来関東軍がデンと構えているよ。ビリッともすることじゃないさ」

大きな声でそう云って、梶の方をチラと偸み見た。梶は、黙って、調査報告を書いていた。《出銃に及ぼす生産諸力の影響》と標題がついている。

「関東軍には大西兵長がデンと構えているからね」

と相手が云うと、若い准職員の予備役兵長は得意そうに「そうや、そうや」と笑った。山西作戦で蛮勇を振るったことが、この若い男の生涯の自慢となるに違いない。

「しかし、どうしてやらなかったもんだろうか？」

と、梶の直ぐそばにいる年嵩の職員が話の方へ顔を向けた。

「ドイツが破竹の勢いで進撃したときに、日本がシベリヤへ出兵して挾み討ちすれば簡単だったじゃないか。それこそ関特演以来関東軍にはそれだけの実力があるんだから」

話はそこでちょっと途切れた。南北両面作戦をやるだけの実力が日本にはない、ということだけがおぼろげながらみなにわかっている。しかし、そうやれば早く勝てそうなものだし、赤の脅威を簡単に取り除けそうなものではないか、という気はするのだ。昭和十六年夏の関東軍特別大演習、略して関特演と称する大動員が何の目的で行われたか、一介のサラリーマン風情にわかろう筈はなかった。日本はドイツがロシアに勝つと信じ

たのだ。むしろ、あまりに早く勝つことを怖れたと云ってもよい。ドイツ軍がロシア全土を疾風の如くに席捲して、その驚異的な勢力とソ満国境で対峙するような結果となるかもしれぬことを。

梶は黙って書いていた。シベリヤ出兵をしてくれなかったことは倖せであった。もし出兵が行われていたら、梶などという青年は生きてはいなかっただろう。

「南太平洋ではどうなんだろうね？」

と、別の事務員が小声で云った。

「ほんとうのところ、ガダルカナルから転進したというのは……」

惨敗したということだ。梶は書きながら肚の中でそう云った。全滅を辛うじて免がれたということだ。ただそれだけのことだ。

「戦略的撤退だよ」

大西がまた大きな声で断定的に云った。

「アメリカの奴、やっと取ったと思ったら空ッぽの島だったというわけだ。その間に日本軍はもっと有利な地点から攻撃するんだ。見とってみい」

と、梶の方を、今度はこれでもかというふうに見た。梶は眼を上げた。好戦的な男と反戦的な男、従ってウマの合う筈のない二人の視線が絡み合ったが、梶は直ぐにそらした。入口の方から、梶へ向って笑いながら机の間を縫って来る男が見えたのである。

「恪勤精励だな、相変らず」

その男、影山は、近づくなりそうからかった。太い眉の、いかにもごつい感じの男が、なんとなく親しみ易

く思わせるのは、歯並が白く清潔なせいだろう。
「出銃に及ぼす生産諸力の影響、か」
と、影山は、梶の報告書の表紙を指ではじいて、ニッと笑った。
「どうだ、梶。恋愛に及ぼす戦争諸力の影響、という奴を書いてみんか？」
美千子のことだな？　梶の気持は、甘酸っぱくなった。三日口をきいていない。美千子はこの上の部屋、タイプ室にいる。部厚いコンクリートの天井が梶から美千子をさえぎっている。梶は天井を見たかった。反対に顎を引いて、云った。
「何の用だ？」
「別れに来たんだ。ちょっとばかりセンチだがね」
そうか、とうとう来たか。梶は殆ど口の中で云った。
「……発つのはいつだ？」
明日の朝だ、と、影山は濃い頭髪を撫でた。これはあと数時間で彼の頭から切り落される。今後数年間、或は永久に、いまの形には戻らないかもしれない。
「俺はチンピラの時分に兵隊ごっこはいつも大将だったからね、オトナの兵隊ごっこでもどうにかなるだろう」
「明日とはな……」
梶は自分のことのように気が滅入った。
「ゆっくり話をする間もない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton